

〔泌尿紀要9巻7号〕
昭和38年7月

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 巻 第 7 号

昭和 38 年 7 月

随 想

専 門 家

大阪通信病院 石 原 藤 太 郎

専門家は「強い」と言われる。専門力士や専門棋士の実力が如何に素人と懸絶しているかという様な話をよく聞く。しかし、私自身直接彼等につかつた経験がないので、実際にどれ程強いのかという事になると、今一つ実感が伴わない。専門家が強いのは、スポーツや勝負事に限つたわけではなく、すべての領域でそうあるべき筈で、私にも専門家の「強さ」をじかに感じた経験がないではない。

今年小学校6年生になつた長男は、絵を描くのが好きで、数年前から油絵を習い始めた。日曜毎に先生のアトリエに通うのであるが、途中、交通量の多い国道を横断しなければならぬので、私が往復の護衛を仰せつかつた。「お弟子さん達が描いているのを、ぼんやり見ているのもつまらないから、僕も習つてみようか」と、何気なく喋つたところ、先生は「きつと筋が良いでしょう、是非おやりなさい」とおだてるし、妻も「あなたは、よく、他人の絵を批評なさる位だから定めし御上手でしょう。それに、一つ位は老後の楽しみをつくつておきなさい」と半ばひやかしながらも、真顔ですすめるのだつた。日頃、どの絵が良いの悪いのとえらそうな口をきいていた手前もあり、なに、子供の描く絵くらいなら……、いや、うまくいけばアンリ ルツソオ位まではといううぬぼれも手伝つて、40の手習いという事になつた。それでも、多少気になるので、息子よりは少し上等の道具を揃えたり、「日曜画家」という本を読んで一夜漬の知識をつめこんだりした。

さていよいよ、若いお弟子さん達の間まじつて画架を立て、真白なキャンパスに向つてみると、周囲の人が皆自信ありげに思え、いい年をして初めて絵筆を握る自分が、何ともテレ臭くてならない。此の自意識過剰がいけないのだ、かのチャーチルでさえ、初めてキャンパスに向つた時は、ふるえながら水泳の飛び込み台に上つた様な気持がしたと述懐しているではないか、と自分に云いきかせ、勇を鼓して描きはじめた。時々先生が廻つて来て「うん、仲仲調子がいい。以前にも描いた事があるのでしょうか」などと元気づけてくれる。常套の殺し文句とは知つていても、暫らくは何となく御気嫌になつて絵具をぬたくつていたが、絵具という魔物が、こんな素人の頭使に甘んずる筈はない。ヴェルルールがどうの、マチエールがこうのと、いつぱし頭の中では判つている積りでも、所詮は畳の上の水練、描けば描くほど画面は濁り、凡そ己れの意図するところとは反対の結果になる。こんな筈ではなかつたがといましましいが、すつかりもてあましてしまつた。息子の方はどうしているかと横目で窺うと、ベンテルが油絵具に代つたことなどには、全然抵抗を感じないらしく、子供独特の大胆なタッチで、早や九分通り仕上つている。これではならじと氣を取り直して、又画面と取り組ん

だ。しかし事態は悪化するばかり、遂に二進も三進も行かなくなつて筆を投げだした。煙草に火をつけて、うらめしげに他人の絵を眺めていると、こうなるのを待っていましたとばかりに先生が現われた。やや暫し無言で画面を見廻してから「一寸貸してごらん下さい」と私の筆とパレットを採り上げた。何か絵具を混ぜていたかと思うととんでもない（とその時の私には感じられた）色を無造作につけはじめた。すると、ものの5分間もたたぬうちに、それまでは宙に浮いたブリキ板に泥餿頭を載せた様に見えたものが、皿は皿らしく机の上に落付き、果物は再びその新鮮さを取り戻し、前のものは前に、後ろのものは後ろにと、すべて納まるべきところに納まつた。しかも、中心となるべき一個の桃がぐつと前面へ盛り上つて来たのには驚いた。私はただ啞然として先生の手を見守るばかりであつた。

かくして、和製ルツソオどころの話ではなかつたが、こんなことを繰返しているうちに、私は専門家の「強さ」が益々身に沁みて感じられる様になり、その何気ない一筆にも、如何に長年のそして厳しい修練が秘められているかが判つたのであつた。

中国文学の権威である吉川幸次郎氏は、その著書「漢文の話」の中で、

「私は……他の才能については、人さまのようにゆかず、あまり自信がない。ただし、中国文を読むことだけは、現代の水準では、国内国外を通じ、自負をもつてよいと考える」

と語り、又、俳誌「雲母」の主宰者である飯田竜太氏は、同誌の後記に、

「専門家というのは……自分の実力を常に正しく評価してゆく、きびしい自省の有無にあるのではないか」

と述べている。之等は私が近頃読んだもののうちで印象に残つた、専門家としての言葉である。

専門家である以上、素人の追隨を許さない強さを身につけ、吉川氏程の、自他共に怪しまない自負が持てる様になりたいとは誰しも希うところであろう。しかし、ここに到るには長い、たゆまざる精進が必要であることは言うまでもないが、この自負は又、飯田氏の言う如く、日々の厳しい自己反省を伴うものでなければならないと考える。

泌尿器科専門を標榜してはいるものの、一向強くなれないままに、早や日暮れて道遠しの感が深い私などには、吉川氏の自負には到底達する事は出来ない。だが、専門家の末席を汚しているからには、せめて、その強さへの絶えざる精進と、日々の自己反省を忘れないようにしたいものだと思う。これは、ともすれば懈怠の心を生じ、何事にもマンネリズムに陥り勝ちな今日此頃、私の自戒の言葉である。